HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	対事的モダリティ・対人的モダリティを表すサハ語の文末接語
Author(s)	江畑, 冬生
Citation	北方言語研究, 3, 69-83
Issue Date	2013-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52600
Type	journal article
File Information	06_EBATA.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 3:69-83（北方言語ネットワーク編，北海道大学大学院文学研究科，2013）

対事的モダリティ・対人的モダリティを表すサハ語の文末接語*

江 畑　冬 生
（日本学術振興会特別研究員／東京外国語大学 AA 研）

1. はじめに

1.1 考察の対象：文末接語

サハ語では，主節述語に後続する接語がモダリティを表すことがある．例えば，(1)における *yhy* は伝聞を表し，(2)における *duo* は肯否疑問文を形成する．

(1) ujgur dien ulaxan kyys-teex kihi olor-but-a =**yhy**
PSN という 大きい 力-PROP 人 住む-PAST-3SG =HS
「ウイグルというすごい力持ちの人が暮らしていたという」

(2) ɯarɯj-dɯ-ŋ =**duo**
病む-PAST-2SG =Q
「君は病気になったのか？」

本稿では主節述語の後に出現する接語を考察の対象とし，これを文末接語と呼ぶ．日本語研究における対事的モダリティと対人的モダリティの区別を援用してサハ語の文末接語の分類を行い，文末接語について体系的に記述することを目的とする．

本稿の構成は次のとおりである．第 1 節の以下の部分では，文末接辞に関する先行研究の概略を述べた後，日本語研究における対事的モダリティと対人的モダリティの区別を紹介し，加えてサハ語の述語の構造の概略を示す．第 2 節では，対事的モダリティを表す文末接語を記述する．第 3 節では，対人的モダリティを表す文末接語を記述する．第 4 節では，意味に基づいた文末接語の分類が，形態統語的振る舞いにも反映することを指摘する．第 5 節では本稿の結論をまとめる．

1.2 先行研究

サハ語の文末接語に関する研究は十分とは言えない．文末接語は，従来のサハ語研究における品詞分類では小詞と呼ばれる範疇に含められている．小詞はロシア言語学の用語で

* サハ語（ヤクート語）は北東ユーラシアで話されるチュルク系の言語である．話者数は約 45 万人である．本稿で用いるデータは，主としてサハ語週刊新聞 *Кыым* の電子版から得られたものである．サハ語の音素目録は次のとおり： /p, b, t, d, č[tʃ], ž[dʒ], k, g, s[s~h], x[χ~q], ʁ, m, n, ň[ɲ], ŋ, l, r, j; a, aa, e, ee, o, oo, œ, œœ, ɯ, ɯɯ, i, ii, u, uu, y, yy, ɯa, ie, uo, yœ/. [s]と[h]とは同一音素の異音と見做せるが，音声的隔たりを考慮し区別して表記している．固有語化していないロシア語要素は，ロシア語正書法からのローマ字転写により表記している．匿名の査読者からの有益な助言に感謝申し上げる．

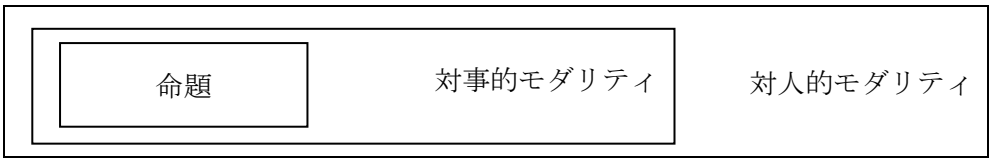
あり，ロシア語では частица と呼ばれる（英語の particle やサハ語の эбиискэ に相当する）．先行研究は個々の小詞の意味・用法を記述する段階に留まっており，その分類・体系化はほとんど行われていない．Xaritonov (1947) や Ubrjatova 他編 (1982) 等のロシア言語学の枠組みに基づく参照文法では，不変化詞類（屈折をしない語類）のうち副詞や後置詞を除いたものすべてを小詞と呼ぶ伝統がある．小詞に関する最も詳細な研究である Petrov (1978) は 100 個を超える形式を小詞として数えているが，この中には名詞句にのみ後続する形式 *baʁas*「〜くらい」も含まれる一方で，単独で述語を構成することのできる形式 *kulu*「寄越せ」（常に要求を表す）も含まれる結果になっている．

たしかに，品詞分類において雑多な要素の集合が生まれてしまうことは避けがたい．しかしながら，サハ語研究における小詞が未だ体系化されていないのは，統語的分布を考慮してこなかったことにも一因がある．本稿は対象を文末接語に限ることで，サハ語の小詞の研究の体系化にも貢献しようと試みる．

1.3 対事的モダリティと対人的モダリティ

近年の日本語研究では，対事的モダリティと対人的モダリティの区別がなされる．例えば庵 (2001: 73) は，モダリティが「出来事に対する話し手の捉え方」を表す「対事的モダリティ」と「聞き手に対する働きかけ」を表す「対人的モダリティ」に分かれると説明し，表 1 のような構造を示す．同様にモダリティ表現を二分する記述は，用語こそ異なるが，多くの日本語研究に見られるものである[1]．

［表 1］ 日本語の文の構造



対事的モダリティと対人的モダリティについて日本語からの具体例を示す．庵 (2001) によれば，(3)の「だろう」が対事的モダリティの例，(4)の「ましょう」が対人的モダリティの例である．

(3) 太郎は花子を殴るだろう．

(4) 一緒にごはんを食べましょう．

[1] 日本語のモダリティ表現を 2 つに大別する研究には，寺村 (1982: 60) の「対事的ムード」と「対人的ムード」の区別，仁田 (1991: 18) の「言表事態めあてのモダリティ」と「発話・伝達のモダリティ」の区別（仁田 (1997: 187) では前者は「事態めあてのモダリティ」），益岡 (2000: 197) の「対命題態度のモダリティ」と「表現・伝達態度のモダリティ」の区別，森山 他 (2000: 81) の「命題めあてのモダリティ」と「発話・伝達のモダリティ」の区別などがある．

1.4　サハ語の主節述語の構造と文末接語の位置

文末接語自体の記述に入る前に，本節ではサハ語の主節述語の構造を示し，本稿が考察対象とする文末接語の出現位置について確認する．サハ語では基本的に，節内において述語が最も後方に現れる．サハ語の複文では，主節が最も後方に現れる．従って，主節述語は基本的に文末に現れる．本稿が考察対象とする文末接語は，もっぱら主節述語の後方に現れるものである[2]．

表 2 に，主節述語の構造を示す．サハ語の述語には名詞述語と動詞述語がある．名詞述語には，肯否および時制が標示されない．動詞述語は 5 つの法を形態的に区別する．いずれの法の形式も肯否を区別し，否定を表す際に否定接辞が付加される（否定はしばしば，後続の時制を標示する要素と形態的に融合している）．直説法・命令法では，時制が義務的に区別される．主節述語においては，主語の人称・数の標示が義務的である．さらに名詞述語および動詞述語の直説法では，疑問詞疑問の接尾辞または感嘆の接尾辞が付加されうる．これら 2 つの接尾辞は義務的な要素ではない．

［表 2］ 主節述語の構造

<table>
<tr><th colspan="2"></th><th>肯否</th><th>時制</th><th>人称・数</th><th>文の種類</th></tr>
<tr><td colspan="2">名詞述語</td><td>—</td><td>—</td><td rowspan="5">{1SG/1PL/
2SG/2PL/
3SG/3PL}</td><td rowspan="2">(WHQ/ADM)</td></tr>
<tr><td rowspan="4">動詞述語</td><td>直説法</td><td rowspan="4">(NEG)</td><td>{PAST/PRES/FUT}</td></tr>
<tr><td>条件法
確信法
危惧法</td><td>—</td><td>—</td></tr>
<tr><td>命令法</td><td>{PRES/FUT}</td><td></td></tr>
</table>

{ } 内は義務的な要素，( ) 内は任意の要素
/ により並列された要素はどれか 1 つのみが現れる

表 2 中の文法形式は，すべて接辞である．本稿の考察対象である文末接語は，基本的にはこれら接辞類の外側に現れるものである（若干の例外については 4.1 節で扱う）．例えば，先に示した(1)および(2)は直説法の動詞述語を持つ文で，時制および人称・数を標示する接辞が付加され，その後方に文末接語が現れている．なお本稿では，名詞述語文は動詞述語文の直説法に相当するものと見なす．

2. 対事的モダリティの文末接語

本節では，サハ語の対事的モダリティを表す文末接語について記述する．対事的モダリティの文末接語には，伝聞を表す *yhy*，推測を表す *ini*，気づきを表す *ebit* の 3 つがある[3]．

[2] 例外として，引用節中の述語の後方にも文末接語が出現可能である．

[3] Aikhenvald (2004: 7) では，証拠性 (evidentiality) はモダリティの下位範疇ではないという議論を行っている．一方で Matthews (1997: 228) は，モダリティは確かさの度合い (degree of certainty) も表すとする．本稿では，証拠性とモダリティは別の範疇だが，意味的にはオーバーラップするものと考える．*yhy*（伝聞）および *ini*（推測）は証拠性と関わる形式でもあるが，対事的モダリ

2.1　伝聞を表す *yhy*

文末接語=*yhy* は，例文(5)から(7)が示すように，命題内容が伝聞により伝えられたものであることを表す[4].

(5)　kim =da　suox =**yhy**
　　誰 =も　ない:COP.3SG =HS
「誰もいないそうだ」

(6)　sandal　bu　kiehe　tœnn-œr =**yhy**
　　PSN　この　晩　戻る-PRES:3SG =HS
「サンダルは今晩戻るそうだ」

(7)　siider　ot-u　syg-en　žie-ti-ger　aʁal-bɯt-a =**yhy**
　　PSN　草-ACC　担ぐ-CVB　家-POSS.3SG-DAT　持ってくる-PAST-3SG =HS
「シーデルは草を担いで自分の家まで持ってきたそうだ」

2.2　推測を表す *ini*

文末接語=*ini* は，例文(8)から(10)が示すように，命題内容が推測によるものであることを表す.

(8)　onno　mehej　suox =**ini**
　　そこに　邪魔　ない:COP.3SG =INFR
「そこには邪魔はないようだ」

(9)　kehej-di-ŋ =**ini**
　　悟る-PAST-2SG =INFR
「君は悟ったようだね」

(10)　xajdax　buol-bup-pu-n　ihit-ti-ŋ =**ini**
　　どのように　なる-VN.PAST-1SG-ACC　聞く-PAST-2SG =INFR
「私がどのようになったか，君は聞いただろう」

2.3　気づきを表す *ebit*

文末接語=*ebit* は，命題内容が新たに気づかれた内容であることを表す[5]. (11)や(12)に見る

ティを表す形式でもある.

[4] Petrov (1978: 146) によれば，文末接語=*yhy* は名詞*œs*「言葉」に 3SG 所有接辞が付加した形式 **œh-œ* を起源とするとされる．なお名詞*œs*「言葉」自体は現代のサハ語では複合語の構成要素等には残るものの，単独ではほとんど用いらることはない.

[5] Aikhenvald (2004: 8) は，証拠性 (evidentiality) と気づき (mirative) は意味的に関連しているも

ように主として話者による気づきを含意するが，(13)のように話し手以外の視点からの気づきを表すこともある．

(11) bukatɯn atɯn kihi =**ebit**
全く 他の 人 =MIR
「[その人は] 全くの別人だった」

(12) uol-lara kel-en tur-ar =**ebit**
息子-POSS.3PL 来る-CVB AUX-PRES:3SG =MIR
「彼らの息子が来ていたのだった」

(13) vanja kiine-tten kel-le ostuol-ga suruk sɯt-ar =**ebit**
PSN 映画-ABL 来る-PAST:3SG 机-DAT 手紙 伏す-PRES:3SG =MIR
「ヴァーニャは映画から帰ってきた．机には手紙があった」

3. 対人的モダリティの文末接語

本節では，対人的モダリティを表す文末接語について記述する．対人的モダリティの文末接語は 7 つある．以下では，肯否疑問を表す *duo*，確認を表す *dii*，教示を表す *ee*，自問を表す *duu*，警告を表す *daa*，説明を表す *ebeet*，感動・願望を表す *ńii* の用法を記述する．

対人的モダリティの文末接語の記述には，田窪 (2010) の談話管理理論が有効である．談話管理理論とは，「談話標識や終助詞を，発話によって知識状態を更新するための指示と捉え」るものである．田窪 (2010) の説明では，話し手は，知識が聞き手に共有されているか否か，聞き手の知識状態の変化を考慮しながら，時には言語形式を変え，対話を進めるのである．以下では，話し手と聞き手の知識状態も考慮に入れつつ，対人的モダリティの文末接語の用法を記述していく．

3.1 肯否疑問文を形成する *duo*

文末接語=*duo* が付加されると，肯否疑問文が形成される[6]．肯否疑問文の典型的な用法は(14)や(15)に示すもので，話し手は命題内容を知識として持っておらず，それを聞き手から得ようとするものである．

(14) bu balɯɯha kiene =**duo**
これ 病院 のもの:COP.3SG =Q
「これは病院のものですか？」

のの，両者ははっきり異なると述べている．

[6] なお肯否疑問はイントネーションのみによって表すことも可能である．

(15) ol kinige-ni ulars-ɯa-ŋ =**duo**
その 本-ACC 貸す-FUT-2SG =Q
「君はその本を貸してくれますか？」

やや周辺的な用法になるが，次の(16)のように命題内容自体の真偽に関心が置かれるというよりは，聞き手に対する軽い非難の意味合いが含まれることがある．

(16) bihigi emie deriebine-tten tœryt-teex e-ti-bit =dii
私たち また 田舎-ABL 根-PROP AUX-PAST-1PL =CLT
umn-an kebis-ti-ŋ =**duo**
忘れる-CVB AUX-PAST-2SG =Q
「私たちも田舎出身者だったでしょう．忘れちゃったの？」

3.2 確認を表す *dii*

文末接語=*dii* には 2 つの用法が認められる．1 つは，命題内容について話し手は十分に知識があるが聞き手はまだ認識していないと判断され，話し手が聞き手に確認を求める用法である．(17)や(18)がその例で，例えば(17)では，「私が近況を話していない」ことは聞き手はまだ認識していないと判断されている．

(17) arba sonum-mu-n kepsee-bekke olor-o-bun =**dii**
ところで ニュース-POSS.1SG-ACC 語る-NEG-CVB AUX-PRES-1SG =CLT
「ところで，私はまだ近況を話していないじゃないか」

(18) tuox tuox-taa aʁal =ere
何 何-VBLZ:IMP:2SG 持ってくる:IMP:2SG =CLT [7]
bɯtɯɯlka-m suox dii-bin =**dii**
瓶-POSS.1SG ない:COP.3SG 言う:PRES-1SG =CLT
話者 A「あれだ，あれをくれ．持ってきてくれ！」
話者 B「私の瓶は無いと言っているでしょう」

もう 1 つは，命題内容について話し手・聞き手双方が十分に認識していると想定される場合に，話し手が聞き手に改めて確認する際の用法である．意味的に日本語の終助詞「ね」に類似している．(19)や(20)がその例で，例えば(19)では，聞き手が太鼓の音を認識しているだろうことは話し手も知ってはいるが，それを改めて確認している．

[7] この例では接語=*ere* が文末に現れている．この接語は命令法や条件法の主節述語に後続可能であるが，連体修飾句・名詞句・副詞節述語など様々な要素にも後続可能である．このように文末以外の統語的環境にも表れうる接語は，文末接語には含めないこととする．

(19) dyŋyr tɯah-a =**dii**
太鼓 音-POSS.3SG =CLT
「[あれは] 太鼓の音だね」

(20) xata oruobuna kel-li-ŋ =**dii**
おや ちょうど 来る-PAST-2SG =CLT
「おや，君はちょうど［時間通りに］来たね」

3.3 教示を表す *ee*

文末接語=*ee* は，話し手と聞き手の知識状態にずれがあって両者が対立的な関係にあると話し手が想定し，命題内容を聞き手に知らせる場合や，時には押しつける際に用いられる．例文(21)から(23)がその例で，意味的に日本語の終助詞「よ」に類似している．

(21) toʁo tɯɯp-pɯk-kɯn-ɯj ep-pit-im =**ee**
何故 触る-PAST-2SG-WHQ 言う-PAST-1SG =よ
「君は何故触ったんだ？ ［触るなと］私は言ったよ」

(22) bert =dii min tœttœry yœr-e-bin =**ee**
良い:COP.3SG =CLT 私 逆に 喜ぶ-PRES-1SG =よ
「[そのことは] 良いじゃないか．私は逆に嬉しいよ」

(23) suox massɯɯna-m alžan-an tur-ar =**ee**
いや 車-POSS.1SG 壊れる-CVB AUX-PRES:3SG =よ
（先行文脈： 明日アルーラーフ［地名］まで乗せて行ってくれ）
「いや，私の車は壊れちゃってるよ」

3.4 自問を表す *duu*

文末接語=*duu* は自問を表す．3.1 節で述べた肯否疑問文を形成する接語=*duo* と一見似ているようだが，接語=*duu* を用いた場合の問いかけの相手は聞き手であっても話し手自身であっても良く，単に漠然としていることもある．例文(24)から(26)がその例で，意味的に日本語の終助詞「かな」に類似している．

(24) emie sata-m-mat-a =**duu**
また できる-REFL-NEG:PAST-3SG =かな
「[そのことは] また駄目だったのかな？」

(25) bu tug-uj tyhyy-byt =**duu**
これ 何:COP.3SG-WHQ 夢を見る:PRES-1PL =かな
「これは何だ？ 私たちは夢を見ているのか？」

(26) salgɯɯ učuutal-lɯɯ-r sanaa-laax-xɯn =**duu**
続けて 先生-VBLZ-VN.PRES 考え-PROP-COP.2SG =かな
「君は引き続き先生として働く考えなのかな？」

3.5 警告を表す *daa*

文末接語=*daa* は，常に 2 人称に対する命令法の動詞述語に後続する．例文(27)から(29)が示すように，この接語は聞き手への強い警告を含意している．

(27) xahɯak-ka suruj =**daa**
新聞-DAT 書く:IMP:2SG =CLT
「新聞に書いてよ」

(28) œlœr-yme =**daa**
殺す-NEG:IMP:2SG =CLT
「殺すなよ」

(29) žaabɯlan-nɯ-ŋ toxtoo =**daa** uoskuj-a tys =**daa**
粗相する-PAST-2SG 止める:IMP:2SG =CLT 安まる-CVB AUX:IMP:2SG =CLT
「君はみっともないことをしたね．止めろよ．落ち着けよ」

3.6 説明を表す *ebeet*

文末接語=*ebeet* は，命題内容を先行文脈と関係づけて説明するのに用いられる．例文(30)や(31)のように，聞き手がまだ認識していない内容を提示する場合と，例文(32)や(33)のように，話し手が認識していなかった内容を自問的に述べ把握する場合とがある．日本語の「のだ」の用法の一部に相当する．なお接語=*ebeet* が疑問文に現れることは無い．

(30) en xajdax iti ikki kuh-u tyher-tee-ti-ŋ
君 どのように その 2 鴨-ACC 落とす-ITER-PAST-2SG
tɯhɯ-tɯ-n ɯt-tax-xa atɯɯr-a doʁor-u-n
雌-POSS.3SG-ACC 撃つ-VN.NEUT-DAT 雄-POSS.3SG 友人-POSS.3SG-ACC
syter-en bɯtaara tyh-er =**ebeet**
失う-CVB ゆっくり 落ちる-PRES:3SG =のだ
話者 A「君はどうやってその 2 羽の鴨を次々撃ち落としたんだ？」
話者 B「雌の方を撃ったら，雄がつれあいを失って，ゆっくり落ちるんだ」

(31) iňňe die-me kɯɯh-ɯŋ buol-laʁ-a =**ebeet**
そう 言う-NEG:IMP:2SG 娘-POSS.2SG である-VN.NEUT-3SG =のだ
（先行文脈：話者 A「娘は自宅を相続するため私が死ぬのを待っている」）
話者 B「そう言うな．［その人は］あなたの娘であるのだ」

(32) tyyl =duu ile =duu čaxčɯ =**ebeet**
夢:COP.3SG =か 真実:COP.3SG =か 本当:COP.3SG =のだ
「[それは] 夢なのかまことなのか？ 本当なんだ」

(33) bygyn min maja-ʁa taxs-ɯax-taax e-ti-m =**ebeet**
今日 私 PLN-DAT 出る-VN.FUT-PROP AUX-PAST-1SG =のだ
（先行文脈：私は 9 時少し前にバスターミナルに到着した）
「今日はマヤまで出かけなければならなかったのだ」

3.7 感動・願望を表す *ňii*

文末接語=*ňii* は，話し手の感動または願望を表す[8]．感動を表す場合，例文(34)のように，接語の直前にしばしば感嘆の接尾辞も現れる．願望を表す場合，例文(35)のように，しばしば条件法の動詞述語に後続する．

(34) nuolur solko berd-in =**ňii**
柔らかい 絹 良い:COP.3SG-ADM =なあ
「柔らかい絹は良いなあ」

(35) ojoʁ-um att-ɯ-gar sɯt-tar-bɯn =**ňii**
妻-POSS.1SG そば-POSS.3SG-DAT 伏す-COND-1SG =なあ
「私が妻のそばにいられればなあ」

4. 文末接語の分類と形態統語的振る舞いの相関

本稿ではサハ語の文末接語について，対事的モダリティを表すものと対人的モダリティを表すものとに分類した．この分類は接語の意味に基づくものであるが，以下で示すように形態統語的振る舞いにも反映するものであり，決してアドホックな分類だとは言えない．本節では，文末接語の分類と形態統語的振る舞いが相関する 4 つのケースを取り上げる．

4.1 人称・数の標示が現れる位置

1.4 節では，文末接語が主節述語の後方に現れると述べた．表 2 では，主節述語には，主語の人称・数を標示する接尾辞が義務的に現れることを示した．これまでに示したすべての例で，文末接語は主語の人称・数を標示する接尾辞に後続している．ところが，対事的モダリティを表す文末接語に限っては，主語の標示の前方に現れることも可能である．この時に動詞述語は非定形動詞に変わる．例文(36)や(37)では非定形述語の後に文末接語が現

[8] 感動や願望は多分に表出的であり，聞き手との関わりが希薄なようにも思える．亀井 他編 (1996: 248) では感嘆について，「一般に表出的ではあるものの，聞き手との関連が考慮されている」という議論を行っている．仁田 (1991: 21) でも，「表出」は発話・伝達のモダリティ（対人的モダリティに相当）の 1 つに下位分類される．本稿もこれらの考えに従い，接語 *ňii* を対人的モダリティに含める．

れ，その後方に現れるコピュラ接辞が主語の人称・数を標示している．

(36) žie-ber sɯt-ar =**ebip**-pin
家-POSS.1SG:DAT 伏す-VN.PRES =MIR-COP.1SG
（先行文脈：朝目覚めて，気づいてみると）
「私は家で寝ていたのだった」

(37) beje-ʁit =da bil-er =**ini**-git
自身-POSS.3SG =も 知る-VN.PRES =INFR-COP.2SG
「あなた方自身も知っているようですね」

主語の人称・数を標示する接尾辞が，2 種類の文末接語の間に現れる例がある．例文(38)では，主語の標示の前方に対事的モダリティの文末接語である=*yhy* が，主語の標示の後方に対人的モダリティの文末接語=*dii* が現れている．

(38) oʁo-nu uor-an kel-en olor-or =**yhy**-gyn =**dii**
子-ACC 盗む-CVB 来る-CVB AUX-VN.PRES =HS-COP.2SG =CLT
「君は子供を拉致してきているそうじゃないか」

対事的モダリティの文末接語には，主語の標示だけでなく，疑問詞疑問の接尾辞も後続することがある．例文(39)では，対事的モダリティの文末接語である=*ebit* の後方に，主語の人称・数を標示する接尾辞と疑問詞疑問の接尾辞が現れている．このような形態素配列は，対人的モダリティの接語には不可能である[9]．

(39) min xaja omuk =**ebip**-pin-ij
私 どの 民族 =MIR-COP.1SG-WHQ
「私は何民族なんだったっけ」

以上で観察したように，主節述語に付加する接尾辞が，対事的モダリティの文末接語に後続することはあるが，対人的モダリティの文末接語に後続することはない．

4.2 文末接語の連続

対事的モダリティを表す文末接語と対人的モダリティを表す文末接語は，この順で連続して現れることが可能である．対事的モダリティの文末接語同士，あるいは対人的モダリティの文末接語同士が連続することは決してない．この事実は，2 つのモダリティがカテゴリを成し，かつ表 1 に示したような構造を成すことを示唆する．例文(40)から(42)には，2

[9] 疑問詞疑問の接尾辞（表 2 参照）が付加しうるのは，3 つの対事的モダリティの文末接語のうち=*yhy*（伝聞）および=*ebit*（気づき）のみであり，=*ini*（推測）に付加することは無い．

種類の文末接語が連続している例を示す.

(40) kylyys ejiexe baar =**yhy** =**dii**
鍵 君:DAT ある:COP.3SG =HS =ね
「鍵は君の所にあるそうだね」

(41) ol žaxtar xoluočuk =**ebit** =**ee**
あの 女性 ほろ酔い:COP.3SG =MIR =よ
「あの女性はほろ酔いだったんだよ」

(42) ataʁ-ɯŋ ytyr-yœ =**yhy** =**duo**
足-POSS.2SG 治る-FUT:3SG =HS =Q
「君の足は治るそうですか？」

文末接語の連続が全く自由に行われるわけでは無い. 対事的モダリティの接語=*ini*（推測）には，対人的モダリティの接語のうち=*duu*（自問）のみが後続する．対人的モダリティの接語=*daa*（警告）は，命令法の述語のみに後続する特徴を有することもあり，他の文末接語には決して後続しない．これらのケースを除けば，2 種類の文末接語の連続はすべての組み合わせについて可能であることが確認できた．文末接語の連続の可能性は表 3 のように整理できる．つまり，表 1 に示したモダリティの層状構造は，それを標示する接語同士の連続にも反映していることになる．

［表 3］ 文末接語の連続

主節述語	対事的モダリティ	対人的モダリティ
	(=yhy/=ini/=ebit)	(=duo/=dii/=duu/=ee/=ebeet/=ňii)

4.3 命令表現との共起

対事的モダリティの文末接語と対人的モダリティの文末接語は，命令表現との共起可能性について対照的である.

対事的モダリティの文末接語は命令表現と共起しないが，対人的モダリティの文末接語のいくつかは命令表現と共起可能である．3.5 節で述べたように，対人的モダリティの=*daa*（警告）は，常に 2 人称に対する命令法の動詞述語に後続する．対人的モダリティの接語=*ee*（教示）も，例文(43)に見るように命令表現と共起可能である.

(43) boruobalan-an kœr =**ee**
試す-CVB 見る:IMP:2SG =よ
「試してみろよ」

例文(44)のような意志を表す形式や，例文(45)のような勧誘を表す形式においても，対人

的モダリティの文末接語のみが出現可能であり，対事的モダリティの文末接語と共起する例は全く見つかっていない.

(44) če min bar-ɯɯm =**duu**
じゃあ 私 行く-IMP:1SG =かな
「じゃあ，私は行こうかな」

(45) ɯŋɯr-ɯax-xa =**ee**
呼ぶ-VN.FUT-DAT =よ
「[彼らを] 招待しましょうよ」

4.4 重文における出現

サハ語の重文は，単に定形動詞が並列されることにより形成される．重文における先行節の述語の後方には，対事的モダリティの文末接語は出現可能だが，対人的モダリティの文末接語が現れることは決してない．例文(46)や(47)が重文の例で，先行節の述語の後方に対事的モダリティの文末接語が現れている.

(46) tajax elbex =**yhy** =da biir =da tajax tur-an
ヘラジカ 多い:COP.3SG =HS =も 1 =も ヘラジカ 立つ-CVB
bier-bet
AUX-NEG:PRES:3SG
「[ここには] ヘラジカは多いそうだけれども，1 頭もいない」

(47) ɯrɯɯnak-ka ɯksaaччɯ min =ere buol-batax =**ebit**
市場-DAT 急ぐ人 私 =だけ なる-NEG:PAST:3SG =MIR
žon uluus-tan must-a oxsu-but-tar
人々 地方-ABL 集まる-CVB AUX-PAST-3PL
「市場に急ぐ人は私だけではなく，人々が地方から集まっていた」

5. 結論と課題

サハ語の小詞に関する研究はまだ十分であるとは言えない．本稿では対象を文末接語，すなわちもっぱら主節述語の後方に現れる接語に絞り考察を行った．はじめに，意味的な観点から対事的モダリティの文末接語と対人的モダリティの文末接語に分類し，それぞれに分類される接語の用法を記述した．対人的モダリティの文末接語については，談話管理理論において主張される話し手と聞き手の知識状態から見た記述を行った．その上で，対事的モダリティと対人的モダリティの区別が単なる意味的な分類なのではなく，次に示すような形態統語的振る舞いにも反映するものであることを示した.

(A) 接語の出現位置．対事的モダリティの文末接語のみが，主語の人称・数を標示する接

尾辞の前方に現れうる．

(B) 文末接語の連続．対事的モダリティの文末接語同士，対人的モダリティの文末接語同士が連続することは無く，2 種類の文末接語はこの順でのみ連続可能である．

(C) 命令表現との共起．対人的モダリティの文末接語のみが命令表現と共起する．

(D) 重文における出現．重文における先行節の述語には，対事的モダリティの文末接語のみが出現可能である．

すなわちサハ語においては，対事的モダリティと対人的モダリティはそれぞれカテゴリをなし，まさに表 1 に示したような層状構造をなすことが示唆される．

本稿は日本語研究を参考にしたものだが，益岡 (2007: 3) に代表されるように，日本語のモダリティは「意味的なカテゴリー」として記述される．日本語研究では，1.3 節で示したモダリティを二分する考えの他，野田 他 (2002: 42) や日本語記述文法研究会 編 (2003) のようにモダリティをさらに細かく分類する研究もある[10]．しかしながらこのような意味による細分化は，根拠のない恣意的な分類になってしまう危険性もある[11]．一方，サハ語における対事的モダリティと対人的モダリティの区別は，一義的には意味から行った分類であるが，文末接語の形態統語的振る舞いに反映する点において文法記述にも有益である．

本稿で扱いきれなかったのは，直説法・命令法以外の動詞述語，つまり確信法・危惧法・条件法の動詞述語への文末接語の後続についてである．確信法および危惧法は頻度が低く，条件法は主節述語としての頻度が低い．そのためもあり結論を得るためのデータとしては不十分ではあるが，現時点においても一定の傾向を見いだすことは可能である．確信法・危惧法・条件法の動詞述語に文末接語が後続する例はこれまでに 18 例が得られた．それらのうち，危惧法の動詞述語に推測を表す接語 *ini* が後続する 1 例を除くと，残りのすべてが対人的モダリティの文末接語の例である．文末接語の数や頻度に違いがあるため数の比較のみから早急な結論を出すべきではないが，それでもこの顕著な偏りは，4 節での議論の延長線上として，文末接語の意味的な分類が形態統語的振る舞いにも反映する例として指摘できる可能性があることを示唆する．

[10] 例えば益岡 (1991) では，「テンスのモダリティ」という分類項目まで存在する．

[11] 対事的モダリティと対人的モダリティの区別に関しては，日本語の研究においても形態統語法との関連が指摘されている．例えば仁田 (1991: 20) は，「言表事態めあてのモダリティを含む単語連鎖が文の一部になりえるのに対して，発話･伝達のモダリティを顕在化させた単語連鎖は，直接引用の場合を除いては，もはや文以外のなにものでもなく，文の一部にはなりさがれない」と指摘する．

略号

ABL	奪格	HS	伝聞	POSS	所有接辞
ACC	対格	IMP	命令	PRES	現在
ADM	感嘆	INFR	推測	PROP	所有(proprietive)
AUX	助動詞	INST	具格	PSN	人名
CLT	接語	MIR	気づき	Q	肯否疑問
COP	コピュラ接辞	NEG	否定	SG	単数
CVB	副動詞	PAST	過去	VBLZ	動詞化
DAT	与格	PL	複数	VN	形動詞
FUT	未来	PLN	地名	WHQ	疑問詞疑問

参考文献

Aikhenvald, Alexandra Y. (2004) *Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.

庵 功雄 (2001) 『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える』 スリーエーネットワーク.

益岡 隆志 (1991) 『モダリティの文法』 くろしお出版.

益岡 隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』 くろしお出版.

益岡 隆志 (2007) 『日本語モダリティ探求』 くろしお出版.

Matthews, P.H. (1997) *The concise Oxford dictionary of linguistics*. Oxford/New York: Oxford University Press.

森山 卓郎 他 (2000) 『日本語の文法 3 モダリティ』 岩波書店.

日本語記述文法研究会 編 (2003) 『現代日本語文法 4 モダリティ』 くろしお出版.

仁田 義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』 ひつじ書房.

仁田 義雄 (1997)『日本語文法研究序説 ―日本語の記述文法を目指して』くろしお出版.

野田 尚史 他 (2002) 『日本語の文法 4 複文と談話』 岩波書店.

Petrov, N.E. (1978) *Časticy v jakutskom jazyke*. Jakutsk: Jakutskoe knižnoe izdatel'stvo.

田窪 行則 (2010) 『日本語の構造 推論と知識管理』 くろしお出版.

寺村 秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』 くろしお出版.

Ubrjatova, E.I., E.I. Korkina, L.N. Xaritonov, and N.E. Petrov. (eds.) (1982) *Grammatika sovremennogo jakutskogo literaturnogo jazyka. Fonetika i morfologija*. Moskva: Nauka.

Xaritonov, L.N. (1947) *Sovremennyj jakutskij jazyk*. Jakutsk: Gosizdat JaASSR.

Sentence-final Clitics of Propositional and Interpersonal Modalities in Sakha (Yakut)

Fuyuki EBATA
(Japan Society for the Promotion of Science / ILCAA, TUFS)

Sakha has several sentence-final clitics for both propositional and interpersonal modality expressions. This paper first classifies Sakha sentence-final clitics as propositional or interpersonal, and then describes their usage. In Sakha, interestingly, this semantic-based classification of modal clitics reflects their morphosyntactic behaviors in several respects, such as the position of person/number marking and the relative order of the clitics.

（えばた・ふゆき　fuyuki@mtc.biglobe.ne.jp）